出る杭研究　災害時避難所におけるペット受容の寛容性と共生モデルの検討

平島怜奈・永澤美保・茂木一孝・今野晃嗣・石原淳子・小手森綾香・菊水健史

研究の背景と目的

【背景】

●大多数のペット飼い主が災害時にペットを一緒に避難させることを優先しており、避難先の受け入れ体制が飼い主の行動に影響していることが示されている。(Melanie Taylor, et al.,2015)

●地震災害における調査では、ペットが被災者の心理的保護因子となる可能性が示唆されている。(Tanaka, *et al.*,2019)

普段、混在しているペット飼い主と非飼い主では避難所での「ペット受け入れ」に対する態度に違いがあり、非飼い主の受け入れ抵抗感が軋轢を生む要因となる可能性がある。

【目的】

災害時の同行避難において、犬の受け入れに対する態度や区切り要求に影響する要因を明らかにする。また、飼い主・非飼い主双方が共生可能な避難所環境について検討する。

研究・調査方法

クロス・マーケティング社の登録モニターを対象にアンケート調査を実施し、得られたデータを解析した。

回答数

避難経験ありの男女:各約240名　避難経験なしの男女:各約750名　計約2000名

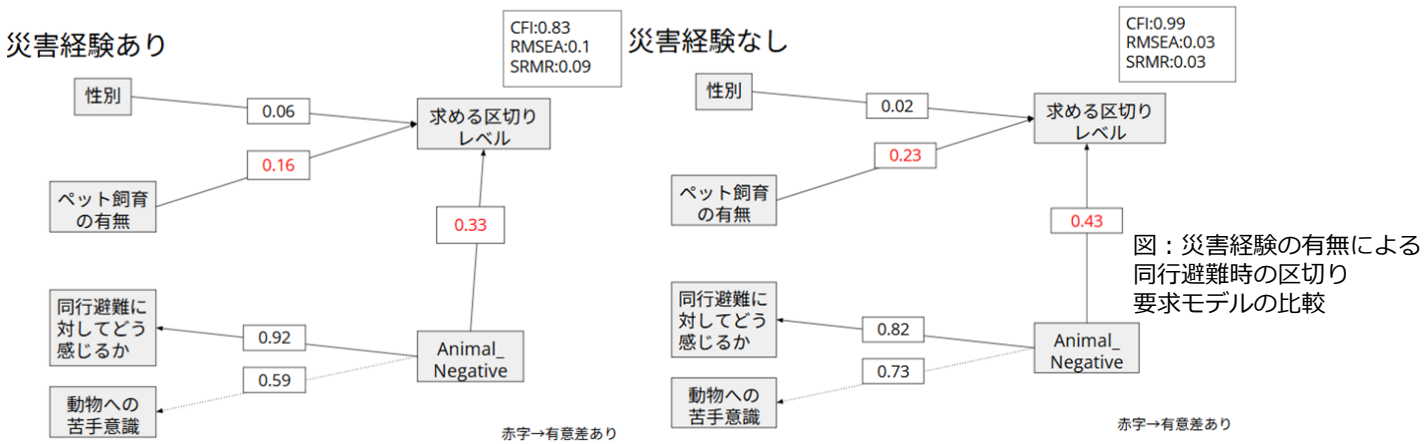
アンケート内容

性別や年齢等の基本情報、地域活動・つながり、性格特性・幸福度、ペット・同行避難について、向社会的行動、防災意識、災害経験の有無

・動物への苦手意識
・同行避難においてどこまで区切りを求めるかなど

結果と考察

動物への苦手意識を「Animal_Negative」と表記

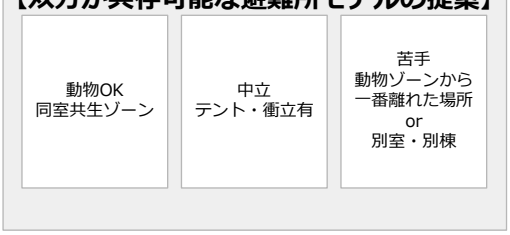


図：災害経験の有無による同行避難時の区切り要求モデルの比較

災害経験の有無で群分けして解析を行った結果、「Animal_Negative→求める区切りレベル」へのパスはいずれの群でも有意であった（$p < .001$）。一方、標準化推定値は災害経験なし群の方が高く、同程度の動物への苦手意識を持つ場合でも、災害経験がない人の方がより高い区切りを求める可能性が示された。

これから

【双方が共存可能な避難所モデルの提案】



高い区切り要求を示したのは、動物への苦手意識が強い人および非飼い主であった。このことから、動物が苦手な人にとっては同行避難環境を心理的に受容することが困難である可能性が示唆されたため、左図のような心理的許容度に応じて空間的距離を段階化した避難所モデルを提案する。これにより双方の心理的不安軽減と、共存可能な避難環境の構築が期待される。そして今後は、心理的不安を考慮した環境設計の検証が必要であると考える。